

意味の揺り戻し 佐佐木頼綱

心の花の二〇周年記念大会では「新しさとは何か」をテーマに短歌の未来を模索する座談会とシンポジウムが企画された。まず座談会では馬場あき子、佐佐木幸綱、俵万智が寺山修司や塚本邦雄の歌をあげながら伝統を踏まえた上での新しい歌について論じ、その後のシンポジウムでは野口あや子、岩内敏行、寺井龍哉をゲストに定綱と私が結社と短歌の未来の形を模索した。論じられた内容については本誌を参照としていただきたいのだが、シンポジウムで論じきれなかった部分があるのでここ少し記しておきたい。

シンポジウムでは「短歌の未来について、新しい歌だと思う歌と自作の新作三首を上げてください。」という設問でパネラーに対して資料を作ってもらったのだが、一番多く上げられたのは韻律の歌であった。

1. 麵すくなめ油すくなめメンマいれて、みをつくしてやこひわたるべき
大松達知『ぶどうのことは』

2. 空中をしずみてゆけるさくらばなひいふうみいよいつ無に還る
内山晶太『窓、その他』

3. ひのくれのひとよひとよにひとかしてみごろしにするなんてわけない
佐々木朔「羽根と根」6号

4. みなみかぜ吹きて花束の身を反らす反らすゆくへの花が見え

ない

寺井龍哉

5. 山ふたつふたつの窓に見ゆるほかなくてななくせ君と待つバ

ス

6. なんてきれい はちす 蓮半身を横たえるときは髪からた わみはじ

めて

野口あや子

7. うんちうんちうんちこんなうんちなりうんちを待つてうん

ちを喜ぶ

大松達知『ゆりかごのうた』

8. ぬぐぬぐの呪文のように唱えては神のパンツぬがせる朝の儀

式ぞ

後藤由紀恵『冷えゆく耳』

1〜5は寺井が挙げた歌。1は通い慣れたラーメン屋で、言い慣れた自分の好みを口に出す時の快感。現代風の口誦性の良さを一首に仕立てている。2は数え歌が無常観に着地する。3、4、5はリフレインが特徴的な歌だが一回目と二回目で文法上の働きが異なる面白さを持っている。6は野口の自作。朗読活動を積極的に行っている野口は音楽の即興性、また古典から吸収した韻律を大事にしたいと語る。7、8は私が口誦性と主体の変化を論じたくて挙げた歌。共働きが家族の基本となり始めた社会で生まれたイクメンの韻律や、介護生活を明るく生きるための言葉の歌。東日本大震災の直後、子どもたちはテレビのアニメ放送に、そしていくらかの大人たちは文や詩歌句を発信する事に心の安らぎを得たという。超高齢化、格差、そして前衛短歌意向の歌壇の歌。大きな偏りの揺り戻しが起き、意味ではなく物語性や口誦性の需要が高まってくるのではないかと若い歌人たちと話しながら感じた。口誦性の気持ちよさ、意味を薄くする面白さ、言葉の続きの滑らかさを大事にした歌が多く生まれてくるのではないだろうか。